虹

戴星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹

【Nコード】

N5479D

【作者名】

戴星

【あらすじ】

虹の根元には古来、宝が埋まっているのだと聞く。だが、主人公はそうは思わない。虹の根元には、もっと醜いものが たとえば生前の思い出を抜かれて朽ちていく亡者が、埋まっているのだと。

虹の根元には死体が埋まっているのだと、私は幼い頃からそう信じていた。

古来よくある話では、宝が眠っているのだというその場所。

何故そんな恐ろしい考えが浮かんだのかはわからない、分からないが虹の七色がそう思わせたのかも知れない。

窪んだ眼窩に蚯蚓を住まわせ、無機質な白骨を尚も朽ちさせてゆく亡者を糧にして、虹は咲くのだ。

生前彼が心惹かれた美しい茜色も、彼女がまどろんだ夢の世界の山吹色も、虹の為の大事な養分となる。

そうして虹は果てしなく伸びてゆく 地中に存在する人間の残滓の事など知らぬげに、鮮やかに。

先程まで地表を濡らしていた雨は、露と凝って紫陽花の葉茎の上に陽光を反射している。

通りを行き交う人々の喧騒に耳を傾けながら、私は我が家の縁側から伸びる虹を眺めた。

虹がただの散光現象の一種に過ぎないのだと知ってしまったのは、幾つの時だったか。

大地へと還元されてゆく亡骸から生えた、荘厳な七色の光が織り成すその帯を、今でもまざまざと脳裏に思い浮かべられると言つのに。

「あなた」

と、妻が不意に私を呼んだ。

肩にそつと手を置いて、彼女は私の耳元へ唇を寄せる。

「今日の虹は、如何です」

「綺麗だよ」

そう言つて振り返ると、彼女は白い歯を微かに覗かせて笑つた。

「私、やっと咲きましたの」

どういう意味だ、と問おうとしてこれ以上愚かな質問は無いと気付いた。
彼女の白い指先が指し示す先に、艶やかな虹が弧を描いて伸びている。

「道理で……一段と、綺麗な訳だ」

これで、ようやく六本目。

私は感慨深げに頷き、妻がもう一度笑った事に気付き慌てて言葉を重ねた。

「いやだなあ、世辞じゃないよ」

雨上がりの夏のむっとする湿気が、庭の至る所から立ち上っている。ややうんざりしていた処へ、少々埃っぽくはあるが、一陣の涼風が吹き込んだ。

と、背後の気配が 急に濃くなった。

「……そろそろあなたも、どうですか」

誰かの冷たい指先は、私の頸をそっとなぞった。

(後書き)

雨上がりのあと、伸びる虹を見ていたらふっと思いつきました。一
発書きですので、特にオチもありません。綺麗な物と醜い物の境界
って難しいですね。

拙い作品ですが、感想等頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5479d/>

虹

2010年10月14日05時38分発行